

通史

自然環境保全活動、 世界の動向

個人的立場で自然を大切にしようということ
は、ヨーロッパアルプスにおいてはかなり早く
から啓発されていたが、組織をもつての具体的
な山岳自然環境活動の歴史の記録はあまり目に
触れない。

一九八二年秋、国際山岳連盟（UIAA）の
創立五十周年記念総会がヒマラヤの麓、ネパ
ールのカトマンズで開催された。この会議で、ヒ
マラヤの自然環境保全問題が提議され、自然保
護の必要性、重要性に伴い具体的な活動にあわ
せ、啓蒙啓発運動の実践が討議され、「カトマ
ンズ宣言」が採択され、山岳自然環境活動の普
及、奨励、振興が当面の重点活動と定められ、

国際山岳連盟指導の世界統一自然環境ポスター
が作成された。この絵柄を使って、各国の言語
でポスターをつくる対策が講じられ、当然、日
本山岳協会でも日本語版のポスターを作成した
が日本の登山界ではそれほど普及活動には成果
も見られなかった。

その後、国際山岳連盟（UIAA）でも具体
的な活動ありませんでしたが、ヒマラヤ登山
に出掛けて行った各国の登山家から、具体的な
活動が必要と、エドモンド・ヒラリー卿を会長
として、事務局長にインド登山財団のキャプ
テイン・コーリー氏を中心に世界の著名な登山
家、ヒマラヤニストがメンバーとなり「ヒマ
ラヤン・アドベンチャー・トラスト」という山
岳自然環境団体が設立されました。日本からは
田部井淳子女史がメンバーのひとりとして加わ
り、一九九〇年、インドのニューデリーで、
山岳環境保護国際シンポジウムが開かれ、日本
からも、当時の山田二郎日本山岳会会長、森田
千里日本勤労者山岳連盟会長、澤村幸蔵日本山

岳協会副会長などが出席されました。

日本の自然保護活動

日本での具体的な山岳自然保護活動は日本山岳自然保護委員会の設立にあるだろう。

一九六三年（昭和三十八年）十月に上高地五千尺旅館で日本山岳会の支部長会議が開催され、西穂高ロープウェイ・上高地スカイライン建設反対が討議され、これをきっかけに自然保護委員会の設置が決議され、今の自然保護委員会の源流となった。

一九六六年（昭和四十一年）八月、大山山麓の鑑ヶ成で開催された、第八回国立公園大会において、自然保護憲章促進が決議され、環境庁へ要望書を提出され、その後、自然保護団体、有識者たちの憲章制定準備を整え、一九七四年（昭和四十九年）六月五日、自然保護憲章制定国民会議で皇太子、同妃両殿下ご臨席のなか自

然保護憲章の制定が宣言された。

一九七一年（昭和四十五年）には日本山岳協会でも自然保護委員会の活動がはじまり、日本勤労者山岳連盟などの自然保護委員会と、各山岳団体で組織的に自然保護活動が積極的に実践され、全国集会などの活動で自然を大切にしよう、きれいな山を守ろうという啓蒙、啓発が一般登山者にも広がっていき、登山者のマナーやモラルの常識として定着していく。

HATJの設立

先の国際山岳環境団体HATが主催する山岳環境保護国際シンポジウム・インド会議に日本の主要山岳団体の関係者が出席した。HATのキャプティン・コリー氏に頼まれて、次回の山岳環境保護国際シンポジウムを日本で開催してほしいといわれ、すでにトラスティの一人となつている田部井淳子委員とも相談の上、日本

開催を引き受けたと、次の山岳環境保護国際シンポジウム東京会議の挨拶で山田二郎日本山岳协会会长が述べている。この準備に当って、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT―J）が国際的にも活動出来る山岳自然環境団体として、創設されたと言ってもよいのではないか。

また、HATのインド会議では、ヒマラヤ登山隊などの入山で、山麓の木々が薪に使われ、植樹活動の必要性に合わせ、登山隊としての責任を痛感したというようなレポートが発表されたということから、日本ヒマラヤ協会（HATJ）にも設立団体となっていたとき、ヒマラヤの自然保護の指導、啓発に取り組むことになった。

確かに、国際山岳連盟の会議に出ても、何かの話のうちに、日本人は世界の山々に登山隊を派遣していながら、国際貢献をしていないというような声を耳にする。ヒマラヤ登山に出掛けた日本の登山者の国際的な自然保護への意識、活動は消極的というか、ただ山に登れば良い

と、自然保護活動まで気がまわらないのか、国際理解の感覚が伝わってこない。

こんな背景のなかで、一九九〇年十月一六日、六本木の国際文化会館でHAT―J設立総会が開かれた。日本山岳会では自然保護委員会と海外登山委員会が中心となって支援体制を整え、各山岳団体からも支援者が派遣され、約千六百名の会員構成で船出した。

創設期

まずは、役員の人選と事務局の設置、活動計画の立案と組織の基本づくり。田部井淳子代表は当然の人事、当時、日本山岳会海外担当理事の神崎忠男が事務局長として、各山岳団体の役員が役員に就任し、事務所は東京原宿の会員の自宅の地下倉庫の一部を借用して、専従事務員をひとりおいて体制を整えた。当然、山田二郎日本山岳会会長はじめ、各山岳団体の役員も会

員となり、約千六百名の会員で新しい登山界のひとつの組織として仲間入りをした。

社会では、公衆道徳観念、登山者としてもマナーやモラルとして、自然や山を出来るだけ自然のままにしておき、後世に今のままの自然や山を残していこうという理念のもと、まずは自分たちが出来る環境活動として清掃登山、クリーンハイクなどと登山道、山からのゴミ拾い活動を実践、H A T - Jの会員になるならなは別としても、H A T - Jが設立されことはたちまち登山界に広がり、H A T - J精神が共鳴され、全国的にゴミ拾いが普及、日本の山はゴミのないきれいな山になりました。H A T - Jはゴミ拾い、山を汚さないという代名詞にさえ聞こえた。活動が目に見え、登山界にも知名度が高くなり、会員としての自信や誇り、登山者としてのステータスにおされてH A T - Jは山岳自然環境団体としての組織体制を整えてきた。

国際活動への始動

H A T - Jが活動をはじめて暫くすると、インドのH A T (本部)がヒマラヤン・エンブロイメントトラスト (H E T)と名称を改めたので、H A T - JもH E T - Jの改名するようにと通達があった。すでにH A T - Jはかなり定着し、また、封筒などの印刷、ここでの改名は好ましくないとの結果をインドのH E Tにも通知した。H A T - Jの名で山岳環境保護国際シンポジウム東京会議が実施され、国際交流青年環境体験登山の富士山集会の案内、準備も進み、名称より中味 (活動)と国際事業の始動がはじまった。

山岳環境保護国際シンポジウム

- ・ 期日 一九九一年十一月九日(土)・十日(日)
- ・ 場所 昭和女子大学キャンパス

- ・主催 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト
 - ・共催 日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会
 - ・後援 環境庁、文部省、日本放送協会、
 - ・協力 財団法人イオングループ環境財団
 - ・公開講座
- 「ヒマラヤの自然を汚染しないために」
- ・ゲスト
 - エドモンド・ヒラリー（ニュージーランド）
 - モーリス・エルゾーク（フランス）
 - ラインホルト・メスナー（イタリア）
 - クリス・ボニントン（イギリス）
 - エドワルド・ムスロフスキー（ソ連）
 - ピエトロ・サガンチーニ（スイス）
 - リチャード・C・プラム（アメリカ）
 - ロバート・マッコネル（アメリカ）
 - カマル・アリ・ミルザ（パキスタン）
 - モハン・S・コリー（インド）
 - テク・チャンドラ・ポカレル（ネパール）

許競（中国）
ドミニック・シトリング（ブータン）
田部井淳子（日本）
坂下直枝（日本）

開催前日は、夕方から大手町のパレスホテルでゲスト・チェアマン歓迎会、シンポジウム座長、パネリスト打ち合わせ会をして、次の日は専用バスで昭和女子大学に移動、九日は主催者、環境庁、日本山岳会関係者のご挨拶につづき、ヒラリー、エルゾーク、ボニントン、メスナーの講演、夕方からは皇太子殿下ご臨席のなか、橋本竜太郎先生の乾杯でレセプションが開かれた。

十日は、分科会と全体会が開催、午前中の分科会は、①高所登山 ②トレッキング、③山岳観光のセッションに分かれ、座長とパネリストのシンポジウムを開催、それぞれ百五十人前後の分散出席。午後は約四百人の出席のなか全体会が開かれた。

最後に、東京アピールを採択して二日間の会議を閉会した。

この後は、日本山岳の実踏を兼ね、日本アルプスの麓に会場を移し、ヒラリー卿はじめ十人の海外ゲストと富山会議を開催、地元の登山者、自然保護愛好家約二百五十人が出席して講演会を開催。

そして、立山博物館、文部省登山研修所を見学し、ヒラリー卿とポカレル、ネパール山岳協会会長の立ち合いのなか立山町立芦峠寺小学校とネパールのクムジュンスクールとの姉妹校縁組の調印式をおこなった。その夜は、室堂・ホテル立山と宇奈月国際ホテルに分泊、次の日、開発と自然保護について考える見学として、関西電力の特別許可をもらい、黒部第四ダムの見学をし、大町に出て、大町山岳博物館を訪問し一連の行事を終了した。

山岳環境保護国際シンポジウム東京会議一九九一報告書を出版、資料として、日本ヒマラヤ協会の協力のなか、「カトマンズ宣言」、「ヒ

マラヤで正しく行動するために」、自然に対するルール、人々の生活に対するルール、余分な物は持ち込まない。テイクイン・テイクアウト」の指導書「ヒマラヤを訪れる皆様へ」「森林破壊防止のために」と注意喚起資料は、今にして通用する貴重な文献と言える。

国際交流青少年環境体験登山

自然保護活動を持続的に未来へ継承していきたいという構想から、青少年の自然保護育成の必要性を感じ、アジアの高校生とアジアの山々をクリーンアップしながらの体験登山計画を実施。

一九九二年 第一回 日本（富士山）

一九九三年 第二回 韓国（雪岳山・ソウル）

一九九四年 第三回 日本

（トムラウシ・北海道）

一九九五年 第四回 中国（長白山・北京）

- 一九九六年 第五回 ネパール
 (アンナプルナ地域)
- 一九九七年 第六回 日本
 (尾瀬・裏磐梯・前橋)
- 一九九九年 第七回 パキスタン
 (アユブ国立公園)
- 二〇〇〇年 第八回 台湾 (雪山東峰・台北)
- 二〇〇一年 第九回 日本 (槍ヶ岳・松本)
- 二〇〇三年 第十回 香港
 (鶏公山・西貢・マポイ)
- 二〇〇四年 第十一回 カザフスタン (天山)
- 二〇〇五年 第十二回 日本
 (富士山・御殿場・東京)
- 二〇〇六年 第十三回 インド
 (花の谷・デリー)
- 二〇〇七年 第十四回 中国
 (幕田峪長城・北京)
- 二〇〇八年 第十五回 日本 (立山・富山)
- この第十五回、日本の立山で実施したのを最

後に休会した。此の頃より、各国や国際山岳連盟等でも同じようなイベントが実施され、各国からの参加者にバラツキが出てきたりして時代的な流れの中で一区切りの節目をつけた。

この活動を通じて、アジア各国との交流の中に親密感ができたりして、HAT-Jの名声が高まり、自然保護活動の代名詞としてHAT-J活動と呼ばれたりして、行動力とともに自然保護精神の啓発には大きな成果が残せた。HAT-Jは日本国内より外国で国際的に有名になった。

HAT-J会員からは、国際活動ばかりして国内活動の充実、活性化をどう考えているのかとお叱りを受けるほどに、海外活動に力が入った。

ネパールでのボランテニア活動

国際交流青少年環境体験登山の活動と平行し

て、田部井淳子代表はネパールのゴミ問題に注目されていた。ある時、H A T J の理事会でネパールのゴミを何とかしたいと提案された。住民にゴミの意識を高めるためには、まず燃えるゴミ、燃えないゴミの分別から指導したい、それには焼却炉の設置がごみ対策には欠かせない対応だろうと、焼却炉の設置計画を発表、同時に植樹活動をして自然保護の必要かつ重要性を認識してもらって、快適な日常生活を体験できる環境を創ろうとの構想に動き出した。

ルクラ村に焼却炉の設置

当時、松田雄一会員がこの計画に執念をもち、簡単な操作で火力がつよく焼却のよい焼却炉の設計を日本の焼却炉会社に依頼した。苦戦と努力の末に、一九九三年にルクラ村の一角に設置が完成。問題なのは、管理や運行、効率的な可動への対応策をカトマンズ在住の日本人、

宮原巍さんに相談して、専従者を置くことにした。燃えるゴミはすべてもやせとルクラ村の住民指示、当然、燃えるゴミ、燃えないゴミを必然的に分けるようになったが、横着、面倒くささから、焼却炉へいくとガラスなどの燃えないゴミが焼却炉の周りにも散らばっている。

りんご園の開墾

焼却炉の設置と時期を同じくして、植樹ボランティア活動しての「りんご園開墾」が始まりました、地元環境団体 S P C C (サガルマタ・ポリユウシヨン・コントロール・コミッテイ) との打ち合わせ、ネパール政府からの土地の借用、地域住民への説明などで現地にいくことが多くなり、その際に焼却炉の点検、住民や専従人への指導で何とか焼却炉の可動も波にのって

きた。
リンゴ園は、ルクラから北へ約一時間半ぐら

い歩いた、エベレスト街道沿いにあるチョプロン村の村はずれにあり、国有地〇三ヘクタールほどの傾斜地を政府から借用した。土地は傾斜し、土壌の地質も悪く、リンゴ園にするにはかなりの整備作業が必要、貯水槽をつくり水道を引き、段々畑としての整地、土壌の改良などリンゴの樹を植えるまでには、時間を要した。資金的にはニッセイ緑の財団の助成が受けられ、苗木は青森県のリンゴ協会からの寄贈、技術的には福島県りんご協会の指導と、植樹事業、海外ボランティア活動に支援がいただけだ。りんごの苗木は行く毎に約百五十本から二百本を持ち込み、育ちのおもしろくない木の植え変えなどの手入の困難がしばらく続いた。また、地元の村人たちが自分の畑にりんごの樹を植えたいと、苗木をもらいに来る。りんご園土壌改良のための堆肥と二本の苗木を交換、中には一週間も歩いて遠い村から来る人もいる。個人の畑は土壌もよくりんごの樹の活着度が高い。

なかなかりんごの実がならないので、女性の

専従作業員を日本の福島県の安斉果樹園で一月の実習研修に呼び寄せたりしましたが、思うようにリンゴ園の開墾が進まないなか、長年、ダウラギリのふもとで農作業を現地の人に指導している木村さんという新潟県出身の日本人の方が、自分の弟子のネパール人、シユレスタ氏をリンゴ園の管理人として派遣してくれて、彼の働きでかなり開墾が進み、リンゴ園らしくなりました。植樹を始めて十年目ぐらいに、リンゴの実をつけた木に育った、日本のリンゴのように肌がきれいでないが、食べてみると甘味もあっておいしいリンゴが取れました。

やはり、リンゴの実がなつてリンゴ園も変わったが、村の人たちの感心も変わってきた。スポンサーもニッセイ緑の財団が助成規程で一事業に十年という決まりがあり、新たにアルソアねむの木トラストの支援を受けることとなり、二〇〇八年にリンゴ収穫祭がアルソアねむの木トラストの関係者の現地視察を兼ねて感謝祭を開催。この時、ルクラ小学校に学用品を寄

贈に訪問、途中の通学路の不衛生な環境に通学路の整備が検討された。

通学路の整備

H A T T J が設置した焼却炉の横の道が、その上にあるルクラ小学校につづく通学路になっているが、路面が荒れていることに合わせ、道端には、動物の糞のみならず、人糞もすくなく、悪臭に不衛生で人通りも少ない。リング園を支援してくれているアルソアねむの木トラストの関係者からも、見捨てておくわけにもいかない、通学路整備の検討がはじまり、衛生環境のみならず安全性を考えて通学路回収整備工事がはじまりました。

路面は平たい石がきれいに敷き詰められ、汚物がたつげられ、見違える通学路が二〇一一年末に完成、通学だけでなく村民の生活路としても喜ばれて利用されるようになった。

この通学路の整備が進むころから、地元環境団体のSPCCとのコンタクトも密になり、SPCC自体、組織が充実し、活動に活発性が見られ、焼却炉、りんご縁、通学路の管理、運行をH A T T J から移管していく話し合いが行われた。さらに、ネパール山岳協会(NMA)のサンタ・ビル・ラマ会長が、H A T T J の環境ボランティア支援事業は、自分の国の問題という意識にたつて、SPCCとNMAが協力して、焼却炉、リング園、通学路の管理体制を整える方向で移管が完了した。二〇一五年四月、ネパール大地震が発生、日本の登山界でも支援活動として、災害募金が始まりました。焼却炉及び建屋、リング園作業所も地震による被害が届き、登山界の支援体制に支援の要請。日本円で百八十万円の支援をいただき、ネパール・カトマンズで開催されたマナスル登頂六十周年記念レセプションに現地支援金を持参、日本の登山界からの支援セレモニーの一環として、H A T T J からSPCCに支援金を渡した。

これを機に焼却炉はH A T—Jの焼却炉よりも規模が大きく効率が良い新しい焼却炉の建設が地元の力で実現する見通しになった。

これらの近況事情で環境対策にもネパール独自の実効性が芽生えていた。そのひとつに、H A T—Jに共鳴して、H A T—N（ネパール）が立ち上がった。

登山界とH A T—J

山岳環境保護国際シンポジウム、国際交流青少年環境体験登山、ネパール環境ボランティア活動など、田部井淳子代表の国際活動は、国際山岳連盟、アジア山岳連盟、特にアジア国々の山岳会からの信頼、信用がたかまり、同時に自然保護、環境保全の意識啓蒙、実行啓発にもつながっていった。

しかし、日本国内では、各山岳団体の自然保護委員会の活動が活発となり、自然保護活動も

組織的な実践から、個人的な啓発に活動視点が移り、H A T—J組織が体制的、会員減少、高齢化と財政確保などから運営、活動に制限をうけ、更に日本山岳会はじめ設立主要団体も役員が変わり、時代が移るなかに、連帯連携に陰りが見え始めた。社会環境、時代の推移から当然の事と言えば当然なことなのだろうが、理想と現実、やりたいことややらなければいけないことが、焦りのようなものになってきた。引き受けての関係で、役員の改選も難しく、また、活動にもきまつた会員しか参加しなくなり、組織の固定化というか、山岳自然環境団体としての機能、活力を失いつつあるなか、田部井淳子代表を喪い、組織に空っ風が吹き始めたが、過去の実績、自然保護という重要かつ必要な目的を支えられて、登山界のまた社会の一員として、期待されていた現実もあります。内部事情は期待に耐えうる体制確保の力量に限界を感じてきた。

ただ、八つある支部においては、自然保護活

動の一環として、清掃活動、クリーンハイクを実施、自然保護精神一途に純粹に謙虚に取り組み、自分たちに非があるとは思っても無かったのが事実でしょう。

ただ、登山界の一員としてのH A T Jの責任や使命、存在価値など総合的実力から、一度、節目のケジメをつけ、新たな時代、新たな自然保護活動にしっかりと向き合える新芽の芽生えが登山界のためかなと考える時機にきたと悟るこの頃です。

全国集会

二〇〇三年十月十一日から十三日の三日間にわたり、会員の交流を図り、より理解し合えることを目指した第一回全国集会を開催、は田部井淳子代表が所有する、地元福島磐梯沼尻高原ロッジで開催された、福島支部が主管して初めての全国集会、開催準備には苦労も多かった

が、「遣り甲斐、達成感のようなものを感じました」とある福島支部員の話を聞くことができました。

全国集会は毎年各支部の持ち回り開催と決まり、第二回は、北陸支部の主管で文部省登山研修所を中心に、立山、奥大日登山で、約六十名の会員が全国から集まって開催された。翌年は、愛知万博に合わせ東海支部の主管での開催を申し合わせた。その後山形、青森、北海道、関西、東京と各支部の努力の中全国集会が開催され、支部持ち回り開催も二巡目を迎え、開催出来る年、出来ない年もありますが、二〇一四年のアジア山岳連盟創立二十周年を記念して、日本の広島で「広島山岳平和祭」の開催に合わせ、日本山岳会、日本山岳協会の自然保護委員会が同時全国集会の開催に合わせ、H A T Jの全国集会も広島で開催された。

マンネリズム的なイメージから全国集会への出席会員も常連的になり、田部井淳子代表が亡くなって、二〇一七年再生H A T Jにつながる

る全国集会をと北陸支部主管で総会と全国集会を兼ね国立登山研修所で開催され、予想を上回る会員の出席。翌年は、田部井淳子代表の顕彰碑が東京御岳のケーブルカーの山頂駅に建立され、田部井淳子代表の誕生日に合わせて全国集会を開催、のアワディシヤK・Das H A T J ーネパール会員も出席しての全国集会。二〇一九年六月二十九日・三十日に青森支部主管で美しい種差海岸での清掃活動に八十五名の会員が集い、H A T J ーJの再興を思わせる全国集会になった。最近にない盛り上がり、青森支部会員の一方ならぬ努力と尽力に感謝し御礼申し上げたい。

二〇二〇年はコロナウイルス感染のために全国集会に限らず、すべての活動が中止となり、時代の波に飲み込まれていくH A T J ーJの運営、活動に、過去の全国集会の意義が思い起こされる。

はつとぢえいウォークとトーク

H A T J ーJは、国際的にも活動できる山岳自然環境団体としての使命を背負って活動がはじまり、山岳環境保護国際シンポジウム、国際交流青少年環境体験登山などで実績を残すなか、国際登山界からは存在感、期待感が高まりました。ネパールのボランティア活動が始まると、H A T J ーJ自身かなりの負担と努力をはらわないうと前に進まない一時代を迎えた。しかし、支部はじめ会員からは、国際事業も良いけれど国内の自然環境活動にも力を注ぐべきという声が聞こえてきた。国際及び国内の自然環境活動を両立させるには、多くの会員の参画、関与がひつようとなり、まず会員が集まれる集会の設定が必要と「はつとぢえいウォークとトーク」活動に活路を開くことにした。

はつとぢえいウォークは、自然を親しむ実践活動。トークは、机上集会として、講義、学習、研修、研究など

による環境問題に取り組む集会。まず、会員にご出席していただき、H A T J 活動の活性化を図りたかった。

第一回は二〇〇四年（平成十六年）十一月七日（日）、芋煮会を兼ねて奥武蔵の物見山、天覧山を歩き、高麗川河原で芋煮会を開催。トークは、はじめるに当たってまず「はつとぢえいウォークとトーク」のレクチャー会からはじまり、二回目は「夏山の天気」を城所邦夫氏を皮切りに「や迄出会う野草と花」「世界の人口、日本の人口」「中高年ヒマラヤトレッキング」のどのテーマで毎月第三水曜日にI C I 石井スポーツ新大久保登山本店七階の会議室を借用して開かれた。しかしながら、思ったように会員の出席は望めず、出席会員もきまつた会員と固定し、テーマ、内容の有意義性は高かったが、会員の集まりでは今一つ寂しいものがあった。それでも会員の為の集会ということで、細々と今につなぎ、会員のコミュニケーションの場として開催されてはいる。

プロジェクトチームと活動

プロジェクトチーム（特別事業促進委員会）は、その時代、世相に対応して、活動の強化をはかり成果をあげたいという目的で生まれ、主要プロジェクトは、オーバーユース、トイレ、東北応援、事業推進活性化などがある。トイレについてはH A T J 創設期から重点活動として、「山のトイレを考える」と題して、一九九六年頃から活発に動き出し、一九九七年三月三日に長野、岐阜、富山の山小屋経営者協会にお願ひして、約七十軒に千五百枚のステッカーを配布していただきました。きれいにトイレ使用をしましょう、特に、トイレトペーパーの分別の啓蒙を目的に登山者及び山小屋関係者の意識啓発をお願いした。すでに此の頃から「持ち帰り」の作戦、ポータブルトイレなどの検討されていきました。ポータブルトイレは大きさ、重量など、また持ち帰りは、自分のものと思っても持ち運ぶことには抵抗感もあり、残念なが

ら課題が山積みです。その後、密封性の強い、かなり軽量の「携帯トイレ」が開発され、持ち帰りに現実味をおび、実用性に期待がもて、H A T T Jでもトイレプロ、ジェクを立ち上げ、携帯トイレの普及、奨励、振興に力を入れ、今もって地道に根強く携帯トイレ普及活動は、プロジェクトチームメンバーの努力で活動し続けている。

オーバーユースプロジェクトは、クリーンハイク作戦、清掃登山活動の成果に、ゴミのない美しい日本の山になったことが登山者の意識の中に浸透し始めた頃、自ずと、オーバーユースによる自然破壊に次なる山岳環境への懸念が生じ、登山者の間でその対策が問題視され、H A T T Jでもプロジェクトチームを組んで重点目標として取り組んだ。

二〇一一年三月十一日、十四時四十五分頃、三陸沖宮城県の東南東130キロメートル付近で、深さ約24キロメートルを震源とする、マグニチュード九・〇の大地震が発生、死者約

一万五千人、行方不明者が七千五百人、また、十二万五千人ちかくの人たちが避難生活をおくるといふ、千年に一度あるかないかという大災害が起こりました。被災した人たちに、何かしたい、何ができるだろうかと、自分のできることを何か具体的にしていきたいと、田部井淳子代表は地元でもある福島国会議員に相談、「避難したものの、その土地にも馴染みず、何もすることがないのがつらい」という被災者の声に、自然の中を歩くということはどんなものだろうか、被災先の観光業者に相談して被災者に打診してもらおうと、自然の中を歩きたいという被災者がいた。初めての試みとして、芦ノ牧温泉に避難している楢葉町の人たちに声をかけ、裏磐梯沼尻ロッジを基点な裏磐梯五色沼探勝路を歩いて、被災者の方々に喜んでもらえることを確認。靴もザックも何もない被災者を応援するため、早速、東北応援プロジェクトを設置。この活動をH A T T Jのみならず登山界にも理解してもらおうと、「東北応援フォーラム」を開催。

宮城県の金華山登山中に大震災に遭遇した、元NHKカメラマンの東野 良さんにお願ひして東北応援企画『東北の自然と山を語る』と題した講演を、昭和女子大学グリーンホールで開催した。これを機会に、月に数回の自然ウォークが実施され、更に、被災した高校生に富士山に登ってもらおうと、二〇一二年七月二十一日から二十三日、二泊三日で、東北の高校生六十五人、山梨県立吉田高校の高校生二十九人で高校生どおしの交流をはかりながら吉田口コースから富士山に登った。実施には五十二人のスタッフ（協力者）で万全な安全対策を施し、雨のなかでの登山であったが無事登頂に成功、下山後の吉田高校での高校生交流会を含め成功裡に終えた。

この東北応援高校生富士登山はHATJの手を離れ、安全の見地からプロの業者にお願ひして、田部井淳子代表は千人の高校生の富士山登頂者を目標に毎年夏に開催されているが、達成なかなばにして田部井淳子代表がご逝去され、

後についてご主人、息子さん引き継いで頑張り、あと少しで千人登頂者に達すると聞いている。

高校生の富士登山はHATJから離れたがHATJ東北プロジェクトチームは継続して活動をしている。避難解除などで地元に戻られた方、もう被災先が安住の地として定着する人と、メンバーに多少の動きはあるものの、東北応援プロジェクトで知り合った絆は固く、自然ウォークを楽しみ、中には、屋久島宮之浦岳縦走に参加し、自然を親しみ、登山に熱中した人まででたことは、東北応援プロジェクトの成果ともいえるのでしよう。これからもHATJの落とし子として自分たちで自分たちの為のウォーククラブとしてHATJ関係者もお付き合いをさせていただくと報告をいただいた。

青少年育成活動

国際青少年環境体験登山の一時代、所期の目

的をはたして、各国山岳会にその引き継事業をお願いしてひとつの区切りをつけさせていたのだ。

当然、日本の子どもたちにも自然に親しみ、共同生活の中に生きる力を養い、一時代の体験として青少年育成活動の一環として、二〇〇七年八月二日から四日の二泊三日の計画で「行く火の山・守ろう自然」をテーマとして栃木県的那須甲子青少年自然の家を利用して子どもも自然環境体験教室が始まりました。二〇一九年七月二十四日から二十六日の実施した第十三回の開催を最後にコロナウイルス感染による非常事態で活動計画が組まれ準備を整えながらもやむなき休止。初期に参加した子どもたちもそれなりに育ち、計画に協力してくれるまでにつづくなど、大きな実績と成果を納め活動の継続に期待が大きい。

また、もう一つの青少年活動としては、特別企画として東北応援プロジェクトチームが田部井淳子代表の意向にそって、福島の子どもたち

にテント泊のキャンプ生活と、山歩きを体験してもらおうと、二〇一五年七月二十六日から二十七日までの二泊三日で沼尻ロッジ前の草原に天幕を張り、自炊してキャンプ生活の中に生きる自分の都からを体験してもらおうと「沼尻ネイチャー夢カレッジ」との名称のもと始まりました。山歩きは雄国山（1272メートル）に登り、夜はバーベキューに花火やゲームで楽しむキャンプの体験でした。翌年の夏も第二回として実施され田部井淳子代表も参加されましたが、二〇一六年十月二十日に田部井淳子代表が逝去されてしまいました。次の年の夏は、田部井淳子代表の意志をついで、ご子息の田部井進也さんの協力の中開催いたしました。その後は沼尻高原ロッジの利用が困難となり、福島の子どもたちに東京に来てもらい、東京近郊の子どもたちに震災の体験談などの話を聞き、安全意識の啓蒙を兼ねて、東京都立奥多摩湖畔公園「山のふるさと村」で開催、参加する子ども的人数も多く、日本山岳会東京多摩支部の有志

の方々にボランティアとして協力いただき、テント泊を体験するなか日の出山（902メートル）に登山。翌年も同じ場所で開催出来ましたがこの第五回をもって、コロナウイルスのため活動が休止している。

この「行こう火の山、守ろう自然」と「ネイチャー夢カレッジ」は共に、独立行政法人・国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」からの助成金での活動として実施し成果を高め社会貢献のひとつとして取り組んできた。

NPPO法人の認可

特定非営利活動法人（NPPO）の認証申請を内閣府提出六月八日に認証を受け、十九日にNPPO法人登記書類を東京法務局に提出、この日をもってHATJはNPPO法人となりました。NPPO法人と認可されて、社会的信頼度が高まると同時に社会的責任も大きくなる。HA

TJも創立以来十七年の歴史をもって、十月から清算手続に入ります。今後は、HATJのこれまでの考え方や実績が更にさまざまな形で発展させていく流れに期待したい。

田部井淳子代表ご逝去

二〇一六年十月二十日午前十時、入院先の川越の病院で、腹膜癌のため享年七十七歳で永眠されました。

HATJの代表を二十五年間務められ、社会貢献、登山界奉仕に大きな実績を残し、まだ、やりたいことを中半にしてご逝去され本人も悔しく思っただけの旅たちと察します。早い突然の事態にHATJの運営、活動に大きな打撃ともなりました。HATJイコール田部井淳子の会と言ってもおかしくないHATJ、再生に未来の設計図を考えていた田部井淳子、活動が低迷し、組織運営が困難な状況下を理解しながら

らも、やり方を変えて再生に意欲を持ち、時代の流れ、社会環境の変化にH A T - Jも変わらなければいけないというH A T - J代表としての責任感の重圧にお悩みになっていたご様子もうかがえた。ただ、周りのH A T - J役員はじめ会員が、代表の思いを汲み取れず、今までの延長での旧態依然とした発想と行動に終始。思い返せば、その当時のH A T - Jはそれが精一杯の現実という状況下にあったのではないかと、も反省させられます。

また、田部井淳子代表はH A T - J以外にも、多種にわたり組織をもつて、社会貢献、ボランティア活動に携わりマスコミをはじめ多くの人たちとの付き合いにH A T - Jはその内の一つということも我々H A T - J関係者は意識しなければいけなかった。田部井淳子代表がお亡くなりになったその年の十二月十八日(日)に母校の昭和女子大学のご理解と協力のなか「田部井淳子さんを送る会」を開催し、ゆかり深い多くの国内外の方々のご参加に田部井淳子代表の偉

大さに再認識させられました。

二〇一七年十月二十三日、御岳登山鉄道(仲田美治社長)のケーブルカー御岳山駅敷地内に田部井淳子代表の顕彰プレートが建立され、その竣工祭除幕式が行われました。これに合わせ翌年、東北応援プロジェクトが主催する「子ども自然体験学校「奥多摩ネイチャー夢カレッジ」で福島の子どもたち共々参拝し、また九月二十二日・二十三日には田部井淳子代表の誕生日に合わせH A T - J全国集会を顕彰碑の参拝を兼ねて御岳神社の宿坊「能保利」に一泊して日の出登山を楽しんだ。

田部井淳子代表のご逝去でひと時代のH A T - J活動の節目を強く感じた。

H A T - J 組織の力

田部井淳子代表亡き後、代表を喪いその動揺、影響をバネに組織の再構築に期待がかけら

れた。

二〇一七年一月二十一日(日)皇居東御苑で開催された新春懇談会・新春自然観察ウォーク、同年の富山支部主管の立山国立登山研修所で開催された全国集会、翌年の東京御岳神社、宿坊「能保利」で田部井淳子代表の誕生日に合わせたの全国集会、青森支部主管の種差海岸での全国集会などにおいてはそれなりに多くの会員が出席してくれた。また、各プロジェクトチームの活動の活性化、「行こう火の山、守ろう自然」など定例行事も、知恵工夫を加えての開催をみた。更に、新しい事業への取り組みとして、毎年十二月に開催されているエコプロ二〇一七「環境とエネルギーの未来展」に自然環境推進プロジェクトを立ち上げ、十七万人も来場する国内最大の環境展示会に、H A T I J の活動を広く広報し、N P O 法人の義務の一環として出展ブースを確保、継続事業として取り組んだが二回の出展後の二〇二〇年はコロナウイルス感染の拡大で開催中止となった。

このように活動の盛り上がりはみたまもの、担当者の努力、一部会員の啓発に支えられたものの、参加者はきまった会員と固定化され、組織、会員全体に反映されず、会員の減少、財政の緊迫が止めきれず、事務所、事務員の退去と再生の道は断たれる方向にあった。発足当時は約千六百会員数に始まったが、二〇二一年の総会では約二百八十名の会員数となり、しかも組織への参画会員も少なく、運営、活動の危機感が免れない現状に直面した。

今回の総会に当たっても、切手が貼っていないながらも返信を頂けない会員が多く、総会開催に支障がでて、あわてて役員がお願いして人員確保にこぎつけたとも聞いている。自然保護活動自体がマナー、モラルの範疇のなかと自分では思っているがこれでは意識、常識からも組織の構図は描けない。

今、H A T I J に入会していただくと会員番号が一九九〇番代、ということとは、始まってから約二千名の会員がH A T I J の会員として携

わったことになる。これが組織のバロメーター……、力と受け止めるには無理があるかと思うが、組織は会員あつての活動力、二千名もの会員がいてHAT-Jとしての三十年間の業績を支えてくれて、それなりの実績が残せたこには素直に感謝し、御礼を言わなければならぬ。

HAT-Jの歴史、実績、伝統には自信と誇りを今でも持っています。組織に何かご利益をいただこうとか、会員として特権や見返りがある、会員奉仕をあてにするクラブ組織ではなく、会員が一方的に社会貢献していく奉仕団体ということに徹しられることが、HAT-Jの組織の力と信じています。

創立三十周年に向けて

二〇二〇年、HAT-Jは創立三十周年を迎えました。田部井淳子代表がお元気な頃より、大きな節目と捉えてきちんとした三十周年を納

めたいと言っておられました。しかし、コロナウィルス感染症拡大で記念事業の開催が危ぶまれた。主な計画としては次のような記念事業を予定した。

① 国際青少年環境体験キャンプ東京2020
しばらく実施していなかった国際交流事業の一環として企画、八王子「大学セミナーハウス」の宿泊、研修室の予約も取れ、イオン財団の助成金も認可され、海外関係団体に案内状を送るまでに準備が整っていました。コロナ感染による非常事態に中止せざるを得ない状況に追い込まれました。

計画の段階で躊躇したのは、開催日程でした。日本の高校生の休日を配慮しましたが、この時期は東京オリンピックが開催され、オリンピックの日程との兼ね合いをどうするかということでありましたが、思い切ってオリンピック開催中の日程に決めさせていただきました。航空券の予約が難しい、混雑など諸般の不都合があり

ましたが、「環境オリンピック」などと国際イベントにとの心意気で計画いたしました。残念ながらオリンピックも延期ということで結果的には現実のものにはなりませんでした。国際青少年環境キャンプも延期か中止と迷いましたが、国際事業という準備の複雑さなどから中止とせめさせていただき、H A T T J最後の幻のイベントとなりましたが、創立三十周年記念事業には相応しい活動として、会員の方からも特別な支援もいただけた。

特に、ここ日本の登山界での国際交流事業が低迷するなか、H A T T Jという枠にこだわらず、日本登山界の国際交流としての意識で計画したことも付け加えておきたい。

② 全国一斉クリーンハイクの実施

二〇二〇年十月二十五日(日)を全国一斉清掃登山日と定め、各支部が一斉にクリーンハイクを実施することにしました。北海道(白川市民の森・青山) 青森(十和田湖外輪山・白雲亭展望

台)、山形(鳥海山)、福島(安達太良山・鬼面山)、多摩(高川山)、首都圏(高尾山)、北陸(奥医王山)、東海(冠山)、関西(高御位山)、関西支部だけは一週間早く十月十八日に実施されたが、あとは全支部、首都圏とも同日同時に開催された。コロナ禍での思い切った開催でしたが各支部の支部長はじめ担当者との適切な対応で計画通りに開催を終えることが出来ました。

③ 記念式典・祝賀会

二〇二一年三月二十七日(土)、東京新宿の京王プラザホテルにて開催、当初は二〇二〇年の秋に予定していましたが、コロナ感染症騒ぎで延期が何回か繰り返され、会場との契約の関係などからも、万全の対策を施して、表記の日程で開催。出席者への制約、三密、移動など困難な条件のなか断腸の想いで開催した。

当日は会員会員三十九名、来賓十九名、総計五十八名の出席者、また三十周年祝賀会の情報

が海外にも届き、幾つかの国からオンライン出席の希望やメッセージ届き、韓国、中国、ネパール、台湾、モンゴルなど海外からのH A T Jへの期待のなかで式典・祝賀会を開催、和やかな雰囲気の中で三十周年のお祝いが出来たことに安堵したことが印象に深い。

この式典・祝賀会の前に、同じ会場で二〇二〇年の総会が開かれた。コロナ禍の総会ということで、会員の意見を反映したいという配慮で、各議案毎の賛否の詳細を配慮した郵送方式の総会でありましたが、返信数が少なく、総会開催定数に支障が出るような状況、コロナ禍で出席できないのは理解できても、切手も貼ってあるのに返信がいただけに現実にはショックを感じた。担当者の努力で総会が開かれ、H A T Jの組織は、二〇二一年九月三十日をもって解散と決議された。

④ 記念誌の発行

H A T Jに限らず、諸山岳団体の周年事業

にあたっては記念誌の発行が定着しているようです。今回のH A T Jの記念誌は、総会で「解散」が決議されたことよって、その意義が多少変わってきた。H A T J三十年の集大成としての最後の出版物になりました。そんな意味合いから、H A T Jを支えてきてくれた会員の存在感が少しでも残ればと原稿執筆をお願いした。作成日程も短く、制作に限界があるなか、発行出来ることに嬉しく思っています。

その他、創立三十周年記念として、H A T J N E W S全編のデジタル化を実現しました。また、定例的活動も三十周年を意識して知恵工夫を凝らしての実施を準備したが、コロナの影響で思い通りに事が運びませんでした。

解 散

二〇二一年九月三十日をもってH A T Jの組織が解散することが、総会で決議されました。

解散については田部井淳子代表のお元気な頃からの課題事項でもあり、一時期、変革か解散かと真剣に考えた時期も有りましたが、二〇二〇年の創立三十周年まで、自然保護活動の重要性からもHAT-J活動に期待しようと、今日まできました。

故田部井淳子代表も、時代の流れ、社会環境、登山界の変遷などから一つのケジメというか節目のタイミングに思いあぐねていたことが、我々にも伝わってきっていた。

解散に関してはここに至るまで、喧々諤々とお話し合われました。現実問題として、既存会員の減少、高齢化、新規入会者の激変、財政逼迫、組織の固定化など、組織を支え、維持する基盤がゆるぎ、解散の潮時、過去の実績、存在感を遺産的に残すためにも、追い詰められすぎた廃会するよりも、多少の余裕を残し、新たな芽が吹きだす期待の中に区切りをつけようとする事で決意した。この現状を会員にも納得していただき、また、登山界、主要山岳団体にも理

解していただくなか、創立三十周年式典、祝賀会を最後に意義ある前向きな解散と信じる中に幕引きをさせていただきました。

組織は終わっても、人と精神は残ります。一時代の所期の目的を果たし、実績と達成感に自信と誇りを持ち、HAT-J精神が、次の時代に新たな芽として芽生えつつくことを期待し、惜しむ心を癒やして有終の美と讃え掉尾とした。

(神崎忠男記)